
新撰な彼ら

shiraha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新撰な彼ら

【Nコード】

N3524X

【作者名】

shiraha

【あらすじ】

銀魂のトシと総悟が監禁された話の中にオリジナルヒロインの佳奈ちゃんを組み合わせてみました。

その他もろもろの話連載中。

鍵取りゲーム

ガタン

目を覚ますと真っ暗なロッカーの中に私はいた。

ガチャ…

「やっとお目覚めですかイ？」

「呑気に寝過ぎなんだよ。」

「総悟にトシ。あー、まあた総悟の仕業ね？」

右隣のロッカーにはトシ。正面の棺桶っぽく横たわるロッカーに総悟がいた。

「違いますぜ？首元のコレ気にならないんでさあ？」

「首？」

私は首を触った。ジャラツと首輪で繋がられている。

「ったく。とりあえず出ようぜ。」

「ん。」

それぞれロッカーから出ると仮面をした男がモニターに映っていた。

《いいか諸君。君たちの首輪は繋がられている。奥の部屋に首輪の鍵がある。それを取れば…》

総悟が全力で走った。

ズルズルズルズル

メリッ

トシが引っ張られ、壁にめり込む。

「手が届かねえ。」

「あれ？私は二人と繋がってない。」

《君は一応華的な存在だ。君専用のトイレもある。》

トシと総悟が引っ張り合ってる。

「私トイレ。」

「いいんですかい？盗撮してるかもしれねえぜ。」

「うそ！じゃあトシが壁になって。」

「ぶはっ！バカかてめえ！」

総悟がニヤリと笑った。

「じゃあ壁を向いて三人でシたらどうですかイ？」

「それはそつだな。」

「私女だから！」

総悟は壁に近づいてった。トシも反対側の壁に向かう。

「やっぱ無理！」

ボタン

私はトイレに入った。盗撮はなさそうだった。

トイレから出るとトシがおかしい気がした。

「トシ？」

「…っ。」

「とりあえずこのコンクリートの欠片でパイプを叩いたらどうですかイ？」

総悟が真面目に言った。

「ああ…そうだな。」

ガンっガンっガンっ

総悟は一人でパイプを叩いた。

トシはそれを見て何か考えている。

「ねえ。総悟らしくないよね。いつもならトシを殺す勢いで石を投げてるのに。」

ガンっガンっガンっ

「何を言ってるんですかイ？今は犯人にとらわれないことが先決に決まってるだろイ。なあ、土方サン。」

「…あ、ああ。佳奈も手伝え。」

「ん。私は私のをほどかないとね。」

トイレのドアノブに巻き付けてある鎖。私はあの鍵まで届かない。犯人によると鍵を一人が使ったら他の二人の首輪が爆発するらしい。

「私のはすぐ取れそう。」

「はあ。佳奈が自由になっても意味ないでさア。」

「総悟の言う通りだな。」

「ちょっとひどくない？もとはといえば二人がドライブに連れて行くとか言って私を拉致ったんじゃない！」

「パトカーに乗ったの初めてって騒いでたじゃねえか。」

「こういう奴らでしたね。」

「私は先に脱出して近藤さん呼ぶからね。」

「へいへい。」

すると、トシが総悟を睨んだ。

「総悟疲れたんじゃないか？先に休めよ。」

「いえ、土方サンこそあの鍵の前で休めばいいでさあ。」

「総悟は鍵の横がいいだろ？」

なんだこの二人。

「私は先に寝るね。」

「俺も寝る。」

「俺が寝るでさあ！」

「うん。寝ようよ。」

バン！

ボタン。

総吾はドア無し。

なにこれ。首が凝るんだけど。最初は総悟の悪戯だと思ったけど、あんなに芝居できるわけないよね。

あと3日もあるし。

グルグル…
お腹すいちゃってなかなか寝れない。

20分後
私は爆睡した。

そして10時間後。

ガチャ

「ふわぁー！寝た寝た！」

「俺も爆睡だったぜ。」

「最高の寝心地だったであ。」

この二人絶対眠れてないね。モニターにまた仮面野郎が映った。

《鍵はまだ取ってないようだな。今から俺の相棒をそっちによこす。
「たけしー！ご飯よー」母ちゃん！勝手に入んな…ブチッ》

「おい。今母ちゃんて言ってたよな？」

「あのパーマからすると浪速ね。」

「そんな事より見てくたせえ。あの影は…」

大きな影が鍵に近づいて来た。

それは大型犬だった！

《ちなみにその犬は光り物が好きでね。いつも散歩の時に俺のところまで持ってくるんだ「たけしー！開けなさい！！お父さんが話があるって！」「たけし。来なさい。」…なんで父ちゃんに言つてんだよー！ガタン》

「ねえ。今お父さん出て来たんだけど。どゆこと？」

「そんなことより。佳奈。この状況で爆笑とはどういう神経でさあ。」

私は爆笑していた。

「だっておかしいでしょ。あのシリアスな雰囲気から犬で…あはは！！」

その時トシが変な声で叫んだ。

「あの犬…鍵を食いやがった！」

「これでいいんでさあ。俺たちは協力して脱出するから鍵はいらねえ。」

「総悟…あんたほんとに総悟なの？」

が、犬が鍵に んこしようとしている。

「うあああああ！！！」

トシが全力で走った。総悟は壁にめり込む。佳奈の笑いが止まる。

「ちょ…。総悟大丈夫？」

「とうとう本性を現しやがったな。」

トシは犬を片手に鍵を窓の外に捨てた。

「これで邪魔な鍵はなくなっただぜ！パイプを壊すぞ。」

するとまたモニターから声がした。

《お前らに脱出するヒントをあたえる。左右の奥のロッカーにアイテムが入ってるから使え。》

ガタッ

「総悟！」

「とりあえず見てみるしかないでさア。」

開けたらチューチューアイスが一本入っていた。

「俺はそっちがいいでさア。」

「あ？これは一本で食うもんだろ。」

「これだから一人っ子は。」

「私にもわけてよ！」

「佳奈は俺のをチューチューしとけばいいんじゃないですかイ？」

総悟が黒く笑った。

「総悟よりトシが大きそうだからトシがいいかな。」

「おまえら何の話してやがんだバカ！」

突然総悟が倒れた。

「俺はもういいでさあ。二人でチューチューしてください。」

「総悟！」

「うそ。冗談でしょ？」

「あっちのロッカーにコレが入ってあったでさア。俺がコレで……」

ブシュッ……

総悟は糸のこぎりで首を切った。

薄暗い部屋に散らばる血……。

「う…そ。」

「佳奈掴まれ！」

トシに手を伸ばすと恋人繋ぎをされた。

「どうしたの？」

「う、おおおおお！！」

トシが総悟を肩に乗せ、私と手を繋ぎ踏ん張りだした。

バキッ

バキバキ…

《まさかあの地道な作業が意味のある事だったのか！》

ぶちぶち…

バキン！

なんとトシは鎖をドアノブとパイプから解放したのだ。

「トシすごい！」

「行くぞ！」

私たちは走った。が、トシは足場の悪いコンクリートによって落ちてしまった。

「トシ！今助けるからね！」

「くそ…！」

総悟がムクリと立ち上がった。自分の首輪を簡単に取り外し、私のも取り外してくれた。

「へ？」

「楽しかったでさア。土方…バイバイ。」

ヒュー…

「ふざけんなコノヤロー！」

ドゴッ

「やっぱり総悟の悪戯だったんだね。」

《いやあ！楽しかったですね！またお願いします！》

「今度は銀パツパーマ野郎にしますぜ。きつと面白れえモンが見れるでさア。」

鬼だ。可愛い顔してやっぱ総悟は鬼だ。

「さ、佳奈とドライブの続きでもしましょうかねイ？」

「え。トシは？」

「土方の野郎はもうよじ登って来てまさア。」

下を見るとトシが鉄骨を自力で登っている。

「総悟おおおお！！首洗って待ってる！！」

「知るか。佳奈は俺のモンでさア。」

「最後だけヒロイン落ち??」

こうして総悟のドッキリは幕を閉じた。

鍵取りゲーム（後書き）

中途半端な話から始まってしまいすいません。徐々に銀魂を勉強していきます。

マヨから始まる不思議な出会い

これはオリキャラと真選組二人の出会いの話である。

沖田総悟は土方十四郎と町の巡回をしていた。

「げ。マヨが切れた。総悟買ってきて来い。」

「俺ア忙しいんでね。」

「って！何アイマスク取り出してさあ寝よつ的な顔してんだよ！」

「マヨ臭いんでこれ以上近づかねえでくだせエ。」

そんなわけで土方十四郎は近くのスーパーに入ってた。

「げ。マヨが品切れじゃねえか。」

レジに並ぶ女がカートいつぱいにマヨを入れていた。

「おい。１０個譲れ。」

「へ？ああ、マヨなら5キロ先のスーパーにありましたよ。」

それが佳奈との出会いだった。

「頼む！一個でいいから！」

「真選組が土下座していいんですか？」

「マヨの為ならしょうがねえ！」

「何がしょうがねえんですあ。マヨくらい取りあげりゃ…。」

沖田総悟は固まった。マヨを持つ女に見覚えがあったからだ。

「おめーは姉貴の知り合い。」

「総悟じゃん！」

そしてマヨを半分貰った土方。

「自分のスーパーがマヨ切れ？」

「そうそう。ウチの店やたらとマヨの売れ行きが良くてね。」

「おめーのおやじさんの店なんじゃねえかい。あの屯所の前の店。」

土方はタバコの火を付けた。

「ったく。誰だそんな重度のマヨラーは？」

「コイツでさあ。二度と店に出入り禁止にしねえとまたマヨ切れしますぜ？」

こうして彼らは出会った。

「おい。スーパーの娘。」

「土方サンですよ。私は佳奈です。」

「これからキープたのんだ。」

「土方の野郎のおかげで昼間の時間がなくなっただでさあ。」

...

...

「佳奈との出会ってコイツのおかげだったな。」

ちゅー

マヨをすすするトシ。

「俺ア遠い昔から出会ってたでさア。」

「もうちょいマシなエピソードなかったわけ!!」

私たちの出会いはマヨから始まった。

ミントン山崎

最近山崎がソワソワしてやがる。俺は仕方なく後をつけた。

ドカン！

あと半歩遅かったら当たってた。

「何サバろうとしてるんでさア。」

「総悟。まだ時間あるだろーが。」

日常茶飯事の事だから驚きもしねえ。

「俺ア一眠りやす。」

チツ。総悟のせいで山崎を見失っちゃった。

適当に廊下を歩いていると、塀を越える高さまで跳ねるミントンの羽を見つけた。向こうで誰かがミントンやってやがんのか。

俺は直感的に正門を出た。

「山崎と佳奈！」

二人は楽しそうにミントンをしていた。

「いやあ。日に日に上達してますね！」

「山崎さんが教えるのが上手いんですよ。」

ぽーん

ぽーん

「山崎の野郎俺の佳奈に手エ出すなんざいい度胸でさア。」

「びびりした。お前寝るんじゃないかったのかよ。」

「そろそろオシオキの時間でさア。」

総悟がニヤリと笑った。

「うわぁ！沖田隊長！」

「慌てるほどの事じゃねーよ。」

総悟は鞘を…。

「あれ？ミントンラケット？」

「佳奈をかけて勝負だ。ミントンキャラは俺が奪ってみせるぜ！」

「やめろ総悟。時間だ。」

俺はいいタイミングでコート中に入った。

ズビシィ！

あれ？今頭に何か当たった気がするんだケド。

「部外者はすつこんでろ。」

へ？山崎？

「土方サン。男の勝負に口を挟むモンじゃアねエぜ？」

邪魔？ねえ。俺邪魔者？

「トシ。マヨあげるからおいで。」

「俺はモノで釣られる…。」

そして佳奈の隣でマヨをすすりながら二人の試合を見た。

「沖田隊長やりますね！」

「俺より早く彼女作ってんじゃねエよ。」

「まさかそんなプライドの為に？」

だんだん飽きて来たのか欠伸をし出した佳奈。

「トシ。私帰るね。」

「このマヨ貰っていいんですか!？」

「なぜに敬語。トシに持って来たからあげる。てか、口つけてるか使えないし。」

「いつでも遊びに来い!」

マヨがタダで貰えるなら何でもいいんだよ。

「こんなモンでさア。」

総悟は山崎に勝った。

「沖田隊長!ミントンキャラはどうか取り上げないで下さい!」

「土方の野郎抹殺計画に協力するなら仕方ねエ。」

「おい!聞こえてるぞ!」

「はい！協力します！」

そしてまた総悟がニヤリと笑った。

購買部的な役割

真選組の屯所の前の小さめのスーパーの娘で手伝いをしている私、佳奈。

元々は総悟の家の近くだったんだけどつい1年ほど前に越して来た。真選組の人たちが訪れる事が多い…わけじゃない。たまに近藤さんが来てくれる程度かな。

「あー…、暇。」

適当に店の窓の掃除をしながら呟いた。

ガー…

自動ドアが開く音がしたから大きな声でお出迎えした。

「いらっしゃいませ!」

「最近見ねエと思ったら真面目に働いてたのかイ?」

ニヤリと総悟が笑った。

「ひょっとして近藤さんのおつかい？」

「バナナ食いてエって不機嫌そうに呟いて胸を叩いて暴れてたぜ。」

「ゴリラと間違ってない？」

総悟は真選組ソーセージの前で止まった。

「今なら一本増量だよ。」

「領収証くだせイ。」

バナナ一房と真選組ソーセージを買ってった総悟。経費で落とすあたり彼らしい。

また暇になった。

ガー…

「いらっしやいませ。なんだ。トシか。」

「最近近藤さんが元気ねえんだよ。フルーツ盛りあるか？」

「さっき総悟がバナナ買ってったよ。」

「へえ？やっぱ俺はフルーツ盛りを買わねえとな。あと、タバコ。」

レジに走る私。

「親父さんはいねえのか？」

「ん。お父さんもお母さんも営業に行ってるよ。」

「こんなちっせえスーパーが営業に行くのかよ！」

「半分サボりだと思っけど。」

トシは経費で落とさないらしい。

「またドライブ行こうぜ。今度は二人きりがいいな。」

「パトカーならやだよ。」

トシはタバコに火をつけて店を出た。

近藤さん大丈夫かな。

ガー…

「佳奈ちゃん！元気？」

近藤さんはめっちゃ笑顔で店に入ってきた。

「あれ？近藤さん元気ないんじゃない？。」

「俺はずっと元気ピンピンだ！」

総悟もトシも理由をつけてここに來てくれたのだろうか？

「バナナ安いな。」

暇すぎるからバナナを買ってもらった事にした。

ハピバ天パくん

「お。喧嘩か？久しぶりにやるか。」

土方の野郎がパトカーから下りた。しゃあねエから俺も遅れて下りやした。

パチンコ屋の前で野次馬が集まっている。

「あれ？多串くんじゃねえの。」

天パでやる気のなさそうな男が近づいて来た。

「あんちゃん。話ついてないぜ！」

「へ？だから、俺はパチンコの玉くすねたりしねえってば。」

「うそこけ！俺の一箱丸ごと持ってったじゃねえか！」

くだらねえ掴み合いしてやがる。土方サンもあきれて…。あれ？何かこの人汗すげえでさあ。

「総悟。俺アパチンコの玉なんかくすねたことねえからな。若気の至りとかじゃ全然そんなん…バカだろアイツバカ！」

「カミングアウトしてどうするんですかい？」

「よし。行くぞ。」

それにしても、銀髪天パの男どっかで見たことあるような。

「おい。何してんだ？」

「やっぱり大串くん。このオッサンが因縁つけてくんの。俺今日誕生パーティだから忙しいんだけど。」

「分かった。一箱分払え。」

「マジで俺を疑うわけ？この純粋な眼差しが見えないの？」

「ただのオッサンの喧嘩でさア。散った散ったア。」

野次馬を解散させて二人を見た。

「俺、ジャンプ代しか手持ちないんだよね。」

土方サンは銀パツ天パ野郎の財布を奪った。

「こりゃ、ジャンプ代もねえな。」

「え。あのオッサン俺の財布からお金までとったの？一箱分払えよ。」

「いや、話をややこしくしても無理だから。」

店の人が出て来た。

「あ……。サングラスの親父が一箱奪うのを見ました。」

「ほら、俺じゃねえだろ。あーあ。パーティに遅刻しちゃう。そー

だ。あのパトカーなら間に合うかも。」

「テメー…斬る！」

俺は山崎に車を出すように言った。

「ハピバでさあ。」

10月10日は銀ちゃんの誕生日。

おめでとう！銀ちゃん！

本気と書いてマジと読む

ピー…

「はい。ちょーちん付けないとダメだよ。」

総悟はチャリの鼠取りをしていた。が、注意したチャリは慌てて逃げてった。

「今のガキはしつけがなつてねエでさア。」

「テメーもガキだろ。」

「土方サン。何しに来たんですかイ？」

「息抜きにタバコ買いに来たんだよ。」

結局この日は真選組の屯所に帰ることになった。

「ガキといやあ、佳奈って何歳だ？」

「ありゃあ童顔だから、俺よりガキでさあ。」

「佳奈さんは22歳ですよ。」

運転手Aが話した。

「なんで知ってんだよ。」

「山崎から聞きました。」

しーん

パトカーの車内は静かになった。

「腹ぺこでさあ。」

「マヨならあるぜ。やらねえけどな。」

「真選組ソーセージ食いてエ。」

ふと外を見ると佳奈が男と歩いていた。

「俺ア健康の為にジョギングで帰りまさあ。」

「…。車停めろつてよ。」

「はあ。」

総悟は腹ペコなものも忘れて走りだした。

「総悟！」

「副長…。叫びながら何マヨを取り出してんすか。」

…

「佳奈ア。見損なつたぜイ。」

「ちょうど良かったあ！今道聞いてたの。この方がめっちゃ親切で

ね。」

「じゃ、これで。」

道案内人はすたこらさつさと逃げてった。

「俺と言つ男がありながら浮気するたア。そんなに俺を好きなんですかい？」

「何度も言っけどね。総悟の彼女じゃないから。」

佳奈の綺麗な黒髪が風に揺れた。

「ギャグに決まってるア。」

「まあ、可愛い。」

なんなんだ。コイツら。と二人を見ながらトシは後ろから歩いていった。

「佳奈って方向音痴だったのかイ？」

「ちっ！違うから！たまたまなの！」

「真っ昼間から下ネタとはいただけねエなア。」

どうにかトシが入った。

「土方さんはパトカーで帰ってくだせえ。佳奈は俺が送りやす。」

「総悟デメー！そこまでして抜け駆けしてえのか？もうパトカーは帰ったよ。」

「二人とも私は一人で大丈夫だから。てか、トシはマヨに恋してるだけでしょ？」

トシはたまにマヨを差し入れるから好きなのか。

「俺は親父さんにバズーカを改造してもらっただけさア。邪魔しねエでくだせエ！」

「お前も親父が付録だから好きなんだろうが！」

と言う事らしいです。

「どうせ。私には魅力ないですよ。」

先を歩く佳奈でした。

改造王の父を持つ子供の苦悩

私のお父さんはツルっとハゲている。

「佳奈ー。ペンチ持って来い。」

「自分で取ってよ！」

と言いながらもペンチを渡す私。

「お前の彼氏割り引きだから手伝ってもいいだろ。」

「総悟は彼氏じゃないってば。」

こんなに武器を改造したら、真選組に捕まってもおかしくないの
いいのかな。

「できた！バズーカ花火にバズーカクラッカー。」

「良かったあ。それなら安全だね。」

裏口から総悟が入って来た。

「お父さん。パーティに盛り上がるバスーカ出来やしたかい？」

「まだお父さんになってないよ？コレがバスーカ花火だ。でこつちがバスーカクラッカー。」

「面白そうでさア。さっそくこつちのクラッカーを土方の野郎に試してみるでイ。」

やっぱ副長の座をもらう為に作らせたんだ。

「ときに総悟くん。」

「なんでさア。」

「ちゃんとお金くれるんだろうね？」

「…ケチくせエハゲだぜイ。領収証を真選組当てでおねげエしやす。」

「はい。まいどあり。」

けど、本物のバズーカより危険じゃないはずだからトシにとっては良かったのかも。

その日の晩。
真選組屯所。

「はぁ…。スッキリした。最近便秘気味ですよ。」

「副長。俺なんか下痢っスよ。」

トシと山崎がトイレから出て来た。

ズガン！

バズーカクラッカーが華麗に飛び出した。

「…。」

「わぁ。綺麗ですね！」

「チッ。腰抜かせたりしねエのかイ。」

トシの瞳孔が開いた。

「おい総悟。片付けろ。」

「生憎俺ア片付けはしねエ主義でさア。山崎ちよつど良いでさア。」

「いや、俺には関係……」

「ミントンラケット折っていいのかイ？」

総悟の手には山崎愛用のミントンラケットが！

「……副長！」

「近藤さんに呼ばれてんだ。次通った時に床が汚れてつと斬るぜ？
山崎。」

「ええー！？汚したの俺になってますよね！ちよつと隊長どこ行く

んですか！」

「次は花火だぜイ。」

次の日の朝、トシの部屋で花火が上がるとは誰も予想していなかっただろう。

「総悟オオオオオ！！テメー斬る！今度こそぜってエ斬る！」

「受けてたちますぜイ！」

こうしてまた総悟は佳奈のパパに頼むのだった。

「あんれえ！？最近領収証無駄に多くね？」

近藤さんは頭を抱えていたとか。

知ったカブリの恐怖

たまーに変なプライドが顔を出したりするじゃない？知らないのに知ってるに決まってんじゃない！って言ってしまうヤツ。

アレ、一番タチ悪いよね。

「まさか佳奈も万事屋の旦那を知ってるたア気付かなかったでさア。」

「すいません。万事屋の旦那なんて知りません。なんかみんな知ってる雰囲気だから知らないとは言えなかっただけです。」

「最近歳なのか物忘れするらしいよね。」

「あー、精神年齢は爺さんかもな。」

トシが頷いた。

精神年齢年寄りってことは若いの？山崎ヘルプ！

「こないだチャイナさんに入れられたボディーパーローがまだ響いてるんですけど。」

チャイナさん？

まさか中国人の美女をはべらせてる人？

「あのメガネの存在感は山崎に比例するでさア。」

メガネ？

メガネかけた旦那？

「多串くんじゃない。久しぶり。」

「今テメーの噂してたんだよ。」

銀髪天パの人が近づいて来た。どうしよう。知らないってバレる。

私は目をつぶった。

「改造ハゲの娘さんだね。似なくて良かったな。うん。似てたら声かけなかったわ。」

奇跡がおきたあ！

「てか、万事屋の前にいて俺に合わないのはおかしいって。」

「で、旦那と佳奈の関係は何なんですア。」

「んー。従姉妹の親父の友達の娘？」

「そう！そうなのよ！」

「撤収すつぞ。」

トシの言葉通り私たちは家路を歩いた。

…

「銀ちゃんいきなりどうしたアル。」

「空気吸いにいったの。」

「銀さん！仕事の依頼来ました！」

「また迷い猫だろ？」

彼らと絡むのはまた後のお話。

一緒にいると自然にマヨ中にな…らねえよ！

「佳奈。そんなにマヨネーズかけたら太るわよ！」

「ぎゃー！なんでご飯にまでマヨネーズかけたの私！」

家族で夜ご飯を食べてる時、お母さんに注意された。

「最近トシとよく食事してたからその時自然とマヨネーズかけてたかも。」

「土方くんはそんなにバランスの悪い食事なのか？」

お父さんの目が光る。

「私が気をつければいいだけだからもうこの話はおしまい。」

そして次の日。

目玉焼きにマヨをかける私がいた。

「あれ。なにこの自然な動き。」

今日はお店が休みだからゆっくり起きたら、両親は出かけていた。

ガチャ…

裏口が開いた。

「ハゲはいねエのかイ。」

「総悟。ノックぐらいしてよね。」

「女捨ててるヤツに言われたくねエ。なんでイその寝癖は。」

「これはいま流行りのファッションよ!。」

総悟が食卓に近づいて来た。

「…。マヨラーは土方の野郎で十分だろイ。」

「私このままじゃ本当のマヨラーになっちゃう。どうしよう総悟。」

ニタリと総悟は笑った。

「そんなの簡単だぜイ。」

総悟は井にご飯を入れ、その上にマヨをぐるぐるとかけた。

「コレを完食すればマヨ嫌いになるぜ。」

「ご飯にマヨネーズ？」

「いいから食いなせエ。」

女としてさすがにコレは食べられないよなあ。

ガチャ…

「総悟。やっぱりここか。近藤さんが…お！旨そうなメシじゃねえか！いただきます！」

ガツガツとマヨ丼を食べるトシ。

「やっぱりマヨはサラダにかけるモノだね。」

「佳奈も食つか？」

「お腹いっぱいだから。」

こうしてマヨラーになりかけた私はマヨラーにはならなかった。

「やっぱり佳奈の店のマヨは最高だな。」

「え。他の店と同じだけど。」

「土方さんは舌が麻痺してるんですア。さてと仕事に戻るとするか
ねィ。」

総悟が帰ってからトシがタバコを吸いだした。

「二人きりだな。」

「トシってばいきなり何？」

「今はいいけどよ。総悟とはぜってえ二人きりになるんじゃないぞ。」

「はい。」

「じゃ、俺行くわ。」

ポンポンと頭をなでられた。

「子供扱いしないでよ。」

ウソ。本当は嬉しいんだよ。

「明日メシ食い行くか。」

「んー。しばらくは無理。」

「はあ？」

「ちょっと健康の為にね。」

「そっぴや太っ……」

「鬼の副長が私なんかとランチなんて笑われるよ？」

トシはニヤツと笑った。

「別に笑われてもいいーぜ？」

「え……？」

トシは裏口から出た。

……

「何言っでんだ俺。」

「土方さん。抜け駆けはいけねエですぜ？」

バズーカが飛ばされたのは言うまでもない。

泣ける映画じゃ泣かねェと思います

暇すぎて死にそうなので、映画を見る事にした。

「これは運命でイ。」

「総悟も映画見るの？」

「『フランダースの斧』ねェ。」

「一緒に見ていいけど、夢壊さないでね。」

総悟と隣に座った。ちょうど真ん中らへん。

「クチャクチャクチャクチャうるせェ。」

「ポップコーンだからしょうがないじゃん。」

映画が始まった。

《この斧があれば、黄金の木を切れるんだよ!》《ダメだ。この斧に触ったら不幸になるんだぞ!》《おじいちゃんが助かるなら僕は構わない》

「グスツ……。そ、ご。ハンカチかして。」

「ずびつ。鼻水つきならあげるぜい。」

総悟が泣いてる!?

「俺ならあの斧で土方の野郎を……」

ブツブツと言う総悟。やっぱり泣いてないんだ。

映画が終わって映画館を出た。

「総悟目真っ赤だよ。まさか泣いて……」

「花粉症が再発したのかもしれないな。ひょっとしてあの木は花粉が飛んでたんじゃねエかい？」

「映画の木から花粉は出ません！」

「よし。フランダースの斧をハゲに作らせるぜ。」

本気で言う総悟が微笑ましく思えた。

「総悟ちゃん。どら もん呼ばうか？」

「まさか知り合いだったんでイ？」

…。
フィクションとノンフィクションを見分ける大人になろう。

嘘から始まるモンなんてねーとは言わない

スーパーの娘の佳奈ちゃん？実は従姉妹の親父の友達の子でも何でもねーんだよ。

ほら、たまに町で見かけるたびちょっと気になってたから、他人行儀な態度されんの嫌だっただけなんだよね。

「銀さん。それストーカーだよ！」

「ストーカーはよくないアル。作者真面目にストーリー考えろよ。」

『万事屋銀ちゃん』は今日も暇である。

「ピラ配りのバイト手伝って欲しいらしいですよ。」

「だりい。新八頑張れ。」

「なんでも、真選組前のスーパーらしいんだけど…。」

「あそこ嫌いアル。酢昆布いっつも置いてないヨ。」

俺はビシッと拳手した。

「ソコは俺が引き受けた。新八と神楽はパチンコ屋のチラシ配つとけ。」

「えー。なんか怪しいアル。」

ビラを取りに行く為にスーパーに向かった。

勘違いして欲しくないんだけど恋とかじゃないからね。

「銀さんこんにちは！」

うわぁ。なんかシャランラン的なBGM聞こえて来たよオイ。

「ビラ配り手伝いに来たんだけど。」

「本当に配ってくれるんだね。はい。コレお願いします。ちなみに歩いて10分以内の場所くらいまででいいから。」

にっこり笑いかけてくれる佳奈ちゃん。

「え。ひょっとして佳奈ちゃんは配んないの？」

「うん。今日は珍しく休みなんだ。」

マジで？俺何しに来たのよ。親睦を深めたいから真選組の前と言うハンデを突き破って来たのにこの仕打ち？佳奈ちゃんってアレ？極度のS？

「途中まで一緒に行こうかな。」

俺は心の中で小さくガッツポーズをした。

「このチラシ佳奈ちゃんが書いたの？」

「分かる？」

字がギャルギャルしてますから誰でも分かるだろ。

「従姉妹のおじさん元気？」

架空の人物が元気が聞かれたよ。

「あー、タラフクさんね。確か今風邪こじらせて寝てばっからしいよ。」

「あはは！タラフクさんらしいね。」

いや、もータラフクさん貴方誰ですか？
そして通じるんだタラフク。

「そういえばユンちゃんが銀さんに会いたがってたよ？最近お店に来てくれない…って。」

ユンちゃん？

俺の架空の従姉妹か。

「ユンは金ぼったくるから俺としても辛いだよ。」

「えー。銀さんには厳しいんだね。」

蟻地獄だ。話が全く分からねーのに繋がるって何！何なの？むしろ繋がって欲しくないんだけど！！

「じゃ、またね！銀さん。」

「おう。ビラ配り頑張るからよ。」

こうしてまた佳奈との溝が深まっていった。

…

「適当にユンちゃんって言ったら通じたし。ユンちゃんって誰？」

悩む佳奈でした。

新撰組？いや新撰組ですから！

新撰組じゃなくて真選組じゃん。と思う方、その通りなんです。

「んー。朝からごちゃごちゃうるさい。」

パチン

蚊は叩かれた。

「つてもうこんな時間！総悟に怒られる！」

佳奈はバタバタしながら顔を洗い、着物を着て家を出た。

「俺の愛が痛すぎて逃げ出したかと思ったぜイ？」

「いや、誰？」

家の前に立ってたのは紛れもなく総悟だった。

「今日は土方の野郎もいねエ事だし。デートでもしやすかい？」

「何言ってるの？今日はトシに日頃の感謝をこめてプレゼント買いに行く日でしょ？」

「マジかよイ。そういう事なら一人で行けや。」

「早く行くよ！」

総悟の手を引き歩き出した。

「はあ…。休みだつてのになんでイ。」

「トシはマ オ好きらしいよね。新しいの出てるじゃん。買ったやつ？」

「ゲーム機がねエとできねエよ。」

総悟はつまんなそうに言った。

「総悟ってば！お父さんとバズーカの改造の話の時だけイキイキしてるんだから！」

「へいへい。土方の野郎なんてケチャップ買えば良いんじゃないか
イ？」

「ケチャップ？」

「マヨより使えますぜイ。もしもの時に血のりになるし。」

マヨよりケチャップの方が健康には良いかも。

「よし。トシをケチャラーに変えよう！」

「プレゼントも決まったことだし、散歩でもどうでイ？」

手を繋がれ私は笑った。

「エスコートよろしく。」

次の日。

「じゃん！ケチャップあげる！」

「会ってそうそう何だ？」

「これからはケチラーになってください。」

「ケチだアア？ テメーらおちよくってやがんのか！？」

トシに追いかけ回されたのだった。

銀ちゃんと書いていい加減と読む

嫌アね。これは偶然だから。偶然少し前に佳奈ちゃんが歩いてるっただけだから。

ほら、電信柱に隠れたりとか全然しないよ俺。

「銀さん？」

「偶然。ホント偶然！こんな偶然あっていいんだろうか。」

ホント俺何してんの？佳奈ちゃんのストーカーになっちゃったよ。うとこだつたよ。

「銀ちゃんって呼んでいい…かな。」

「じゃあ、俺は佳奈って呼ぶから。って何この甘酸っぱいやり取り。酸っぱいのいらなから。」

クスクス笑う佳奈が可愛いくてテンションが上がる。

「銀ちゃんもペットショップに来るんだね。最近のペット面白いよね。」

ふと気付けばペットショップに入っていた。しかもここは怪しいと評判の闇のペットショップ。

ホルマリン付けとかいっぱい並んでるし。

「あー、ファミレス行かない？」

「なんで？せつかくここまで来たのに。」

するといかにも怪しいですって感じのターバンを頭に巻いた店員が近寄って来た。

「コノ犬しゃべるヨ。」

と白い豆柴を抱き上げた。

「銀ちゃん何か話しかけてみてよ！」

「えー？…名前は？」

「ボクまだ名前ないヨ。」

いやいや、オッサンがしゃべってるがな。
佳奈ア？なんでめっちゃ嬉しそうな顔してんのオオオオ？

「しゃべる犬はいくら？」

「オマエラ庶民には買えない値段ヨ。」

「いいなあ。欲しい。欲しいよー銀ちゃん。」

「何援交の雰囲気かもし出してんの？銀さん帰るよ。」

ガ―

「手を挙げる！」

真選組登場。

「ターバン野郎だけでいいでさア。…あれ？佳奈に万事屋の旦那ではねエですかイ？」

「総悟そっち行つたぞ！」

ガッ

総悟は店員の足を引っかけ、転ばせた。

「客からぼったくるたアいい度胸でさア。」

「いいから手錠かけろ。」

こうしてインチキ店員は捕まつてった。

「佳奈も来やがれ。」

「やだ。」

「万事屋の野郎と二人きりたア、妬かせてまで俺に振り向いて欲しいのかイ？」

「どこがどうなってそうなるの！」

佳奈は大串くんに連行されてった。

ワン！

「そんな目で見ても飼えねエからな。」

俺は一人店を出た。

チャイナさんの正体

道端に食べ物が落ちてたら拾ってはいけません。
それは誰でも理解している小さい頃からの教え。

「ウマイ棒みつけ。」

そのチャイナさんは落ちていたウマイ棒を拾った。

「そんなの食べちゃダメだよ。」

「酢昆布無いスーパーの娘に言われたくないアル。」

ヤンキー座りしながらウマイ棒の袋を剥いてるし。

「結構前にウマイ棒に変なの入ってたってニュースで見たけど大丈夫？」

「ムシャムシャ…。そんなに欲しいならくれてやるヨ。」

と言って袋を投げた。私はゴミ箱かよ。

「真選組のみんなが言うチャイナさんだよね？」

「チャイナ？どこに目え付けてるか。これはコスプレじゃ無いアル。」

「やっぱりそうなんだ！可愛いね。もっとセクシー系なのかと思った。」

「このナイスバディが見えないか！胸なんてこんなんヨ！」

ムキになるあたり可愛い。

「神楽ちゃん。またこんなところでサボって！」

メガネくんが歩いて来た。ああ！この人が山崎くんと同じくらいの存在感の人だ。

「コイツが拾い食いしてたアル。」

「いや、口の周りにカスつけて言われても信じないって。すいませんね。…あ！スーパーの娘さん！銀さんが迷惑かけてますよね。」

めっちゃペコペコ頭を下げるメガネくん。

「あー、楽しいからいいですよ？それに銀ちゃん面白いし。」

「なんて良い人だ。って神楽ちゃんがいらない！じゃ、また…えーと…」

「佳奈です。」

「佳奈さん。僕は新八です。じゃ、また！」

バタバタと新八くんはいなくなった。

銀ちゃんに会いたいな。

「佳奈。こんなところで何してんだ？」

「なあんだトシか。」

「ああ？」

そうタイミング良くいかないみたい。

スーパーマリオギャランドウ。

「オイ。総悟。」

「俺は今爆睡してるんでさア。邪魔しねエでくだせエ。」

「いや、バリバリ起きてんじゃねエか。」

「ヘッ。」

「しかも今鼻で笑っただろ！」

総悟に聞くのも面白くねエから、自分で会いに行く事にした。

ガー…

「いらっせーませ！」

「おじさん。佳奈は？」

ハゲがまた一段と光ってるし。

「部屋で彼氏の総悟くんとギャランドウしてるよ。」

「ギャランドウだアアア？」

俺は迷わず突撃した。

ドカドカドカ…
ガラッ！

「総悟ってゲーム下手なんだね。」

「まさか。このセンサーが壊れてるんでイ。」

「マリオじゃねエか！あのオヤジ…ギャランドウとか言ってたぜ！」

「トシもする？」

「ギャランドウで何想像しやがったんですかい？」

ニヤニヤ笑う総悟に腹立つ。てか、コイツさっきまで寝てたじゃねエか！

「お父さんってばギャランドウじゃなくてギャラクシーだし。」

「ギャラクシー？」

「マリオが銀河を旅するって話ですねィ。」

「マリオが銀河を？
へえ。面白そうじゃねえか。」

久しぶりにワクワクしてきた。

「佳奈。もう目が疲れたんじゃねエかい？」

「だね。終わろうか。」

「オ…オイ！」

二人は同時に振り向いた。

「俺もやってみたいんだケド。ダメ？」

「そこまで言うならしょうがねエ。」

「いや、私のだから。」

そして夜更けまでスピンやらジャンプやら…ヨッシーにも乗った。

総悟と佳奈は側に雑魚寝していた。

「げ。夜更けどころか夜が明けるじゃねえか。」

たまにはこんなゲームもいいかもな。

愛しいかい？切ないね。

「最初に言つとくけどこれは恋とかじゃ全然ないから。」

銀さんがこう言い出して、僕は顔を上げた。

「そのくだり言つた時点で恋ですね。」

「コイ？美味しいアルか。」

酢昆布くわえながらまだ食い物の話してるヤツがいるよ。

「銀ちゃん。スーパーの娘ならもなく余つたお菓子も付いて来るヨ。」

「スーパーのお菓子余らないから！」

「メガネは黙つとけ。銀ちゃんに言ってるアル。」

神楽ちゃん前半標準語だし。

「神樂がどうしてもつーんなら、佳奈ちゃんに会いに行くけど?」

「いや、銀さんやることあるでしょ。さっき依頼人のおばさん帰ったばっかじゃないか!」

「んー。明日で良くな? 銀さん疲れた。」

何だよこの甘えキャラは!

「おんぶしてあげようか?」

「振り落とされるからやめとく。新八お願い。」

「えー!? 僕がおんぶするんですか?」

「……………。冗談だよ。そんな嫌な顔することないじゃん。」

「じゃあその間はなんだアア!」

「愛しさでせつなさ?」

「そんなもん捨てちまえ!!」

近頃の銀さんは佳奈さんに夢中らしい。

けど恋とは認めたくないらしくため息ばかりはいている。

「ハア。」

「銀ちゃんが昼間から喘いでるアル!」

「神楽ちゃん。どこでそんなの覚えてるの?」

「深夜番組アル!」

結局銀さんは出かけなかった。

お客様困ります

「佳奈ちゃんお願い。お客様困りますって言うて？」

突然来て突然こんな事言われて少し苦笑いした。

ドカツ！

新八くんが後ろから銀さんをどついてるし。

「あんた何言つてんだよ！お店間違ってるよ！」

「困らせたいなら困らせればいいアル。」

「お客様困ります。」

お父さんが後ろから言った。

「うぐつ。なんだろうこの胸焼け。急に吐きそうになっちゃったよ俺。」

「銀さん何想像してんですか！」

「ナニ？何。」

この三人のコントはいつ見ても面白いなあ。

「万事屋の旦那。佳奈の『お客様困ります』は俺のモンでさア。」

裏口から堂々として来た総悟。

「『もう。困らせないでよん。トシ。』とは言わせたことあるぜ？」

トヤ顔するトシ。って、トシまで裏口使ってるよ。

「ちよつとお！語尾にそんなぶりぶりの『ん』を付けた覚えはないんだけど。」

「今ちつせエ『お』入ってたぜイ？」

「そんなくらい良いじゃん！」

やっぱ『ん』付けてたかも。自分が自分で恥ずかしい！

「えー。俺も困ったちゃん欲しい。新八俺にも買って?」

「困ったちゃんは親しい人限定らしいですから無理みたいですね。」

「もう。銀ちゃんは困ったちゃんアルね。」

すごい。神楽ちゃんが話まとめてる。

「俺も困ったちゃん欲しいでさア。土方さん頼んまさア。」

「オイ。俺が困ったちゃん引き出すのかよ。自分で引き出せ。」

「はあ。ここにるのが客ならなあ。佳奈。部屋で遊べ。」

「ええ!? みんな入んないよ!」

「マリオで勝ったヤツが佳奈の困ったちゃんを手に入れるってのはどうでさア?」

「銀さん頑張っちゃうよ。」

こうして私の部屋に入る面々。

「ここは懐かしのマリオカートで行こうぜ。」

トシが腕まくりした。

「お客様困ります。」

「は？」

「佳奈ちゃん？」

「タイミング悪すぎですマ。」

「私の部屋はゲーセンじゃないの！神楽ちゃん。酢昆布あげるからみんなを帰らせて！」

「そういうことならしょうがないヨ。銀ちゃん帰ろ。」

神楽ちゃんは銀ちゃんを担いだ。

「佳奈さん。迷惑かけてすいません。」

「んーん。また日を改めて遊ぼうね。」

万事屋さんの三人は出てった。

「結局この三人ねイ。」

「じゃあ総悟が帰れ。」

「また抜け駆けですかイ？土方コノヤロー！」

トシと総悟といると落ち着く。男友達ってこんな感じかな。

「佳奈はどっちといたいんだ？」

「んー。」

二人がジッと私を見た。

「じゃあ、山崎くんで。」

そこにはちよつと焦る二人がいた。

ふと迷言を思い出すと疑問ばかりだ

「バカって言う方がバカなんだよバーカ。って最後にバカつつつて
る本人がバカなんだと思いやせん？」

総悟はたまに突拍子のない発言をする。

「いいかい？佳奈の彼氏の総悟くん。バカって何度も言う後者がバ
カなんだよバーカ。」

「それはハゲ…おやっさんの事ですかイ？」

今私のお父さんと決して彼氏と言えない総悟がバズーカの改造をし
ている。私は麦茶を片手に様子を見に来たところだ。

「まあ、ムキになる方が子供だよね。」

麦茶をお父さんと総悟に渡して私も最後に手に取る。

「私、アレが嫌だった。せーんせに言っちゃーろ！ってヤツ。」

「ガキの頃ってそんな発言ゴロゴロしてっからな。」

「そうでさア。…って。土方コノヤロー。いつからここにいやがりやした？」

「スーパーでマヨを調達してから来たぜ。まーたくだらねえモン作ってんのか？」

「土方くん。まさか…略奪する気なのか？」

「お父さん何妄想してんの？ドラマの見すぎ！」

身内の恥ずかしい発言ってこっちまで恥ずかしくなるよ。

「略奪の前に総悟と佳奈は付き合ってねえだろ？」

「チツ。余計な事を。」

「まあ二人のどちらかなら大歓迎だよ。…あの銀髪以外ならね。」

「えー？銀ちゃんいい人だよ！」

「土方くんも何か作りたいか？」

お父さんが優しくトシに笑いかけた。

「笑うと佳奈と似てんな。」

「本気でやめて！」

「小さな頃はお父さんお父さんって言ってたのに寂しいモンよ。」

「ハゲってとこ以外はパーフェクトでさア。」

「総悟怒るよ？」

結局、トシは総悟を仕事に戻しに来たみたいだった。

お父さんが銀さんが苦手なんて意外だなあ。

「銀髪は無職なんだろう？」

「万事屋さんだよ。」

「万事屋？怪しいな。」

心配してくれるのは嬉しかったりする。

いつもありがとね。お父さん。

トシと銀ちゃん

総悟に聞いた話によるとトシと銀ちゃんは道端とかでばったり会っらしい。

「あの二人は実は運命の緑イ糸で繋がってるらしいでイ。」

「いやいや、緑じゃないでしょ。」

「赤ならもつと気色悪いと思わねエカイ？」

色は置いといて。どんな感じなんだろう。

その頃のトシ。

「土方くん。邪魔しないでくれる？」

「お前が止まればいいだけだろ！」

二人は気が合うらしく右に行けば右、左に行けば左。と互いが邪魔

になり通れずにいた。

「まさかまた俺の行くところに出現する気？」

「お前がいるだけだろーが！」

そして二人は来た道へ引き返した。

「ったく。なんでいつもいんだよ。気味が悪い。」

トシは暇なのでそこらへんの喫茶店に入った。

「お姉さん。パフェ大盛りで！」

「大盛りは今やってないんですけど。」

さっそく銀髪が見えた。腹減ったししゃあねエ。

「いらっしやいませ。」

「牛丼一つ。」

「かしこまりました。」

牛丼が来てからマヨをぐるぐるとかけた。

これぞ土方スペシャルだ。

「うわ。マヨに恨みでもあんの？」

「こっち座んな。」

「実はさ。財布忘れちゃったみたいなんだよね。土方くんおごって？」

「そりゃ大変だ。食い逃げで逮捕しねエとな。」

「ちよっと待つてよ！土方くん！」

「その呼び方やめろ。」

仕方ねエな。

「で。何で俺を呼んだんでさア？」

5分後に総悟が来た。

「コイツが財布忘れたらしいぜ。総悟が払え。」

「真選組宛ての領収証作ればいいでさア。」

「最近領収証増えたと思ったらテメーか！」

「じゃあ真選組宛てね。ありがとう土方くん。」

なれなれしんだよ。

「土方くん万事屋の旦那と友達だったんですかい？」

「『くん』じゃねえよ！」

「土方っち。」

「オイオイオイ。テメーら斬る！」

とまあこんな感じらしい。

「だから総悟も知ってるんだね。」

「呼ばれても行きたくねエやイ。」

「いや、ワクワクしてるよね。」

運命のイタズラとはこの事だね。

スクワットは健康に良い

体重計に乗るのが怖い今日この頃。

そういう時はスクワット！

テレビからタイミング良く流れて来た声。

「これだ！」

私はスクワットを始めた。

店番の暇な時もスクワットしよう。

いち。

にーい。

「佳奈ちゃん。ソレ新しいキャグ？」

「ぎ…銀ちゃん！」

「さすがにガラス越しに見えちゃったよ。うん。銀さんはアリだけどね。」

「やめてー！総悟には絶対言わないで！」

あのS男にバレたら…。

「スクワットねイ。」

「でたー！！！」

「真選組の連中にはメガホンで流しやした。」

ニヤリッ。

「銀ちゃんのバカ！」

「え？俺のせいじゃないよね。」

「デブ女になる前に痩せてもわらねエと嫌いになるぜイ。」

「付き合っ てないから！」

「じゃあ、銀さん帰るから。たまには万事屋銀ちゃんをよろしく。」

総悟が来て元気のなくなった銀さんは帰った。

「裏口の扉鍵がかかってたぜイ。」

「お父さん今日いないよ？」

「じゃあ、違う方法でダイエットはどうですか？」

総悟の顔が近づいて来た。

うそ…

ゴチン！

「持ち場を離れんじゃねえよ！」

「土方コノヤロー！」

ドキン

ドキドキ

私避けなかった？どうして。

「佳奈。スクワットよりランニングがオススメだぜ。」

「もついいよ！」

スクワットはいいんです！ダイエットはこまめにやりましょう。

寒いと食べなくなるモノは結局夏も食べてんじゃねえかアアア！

寒いとお客さんも来ないか。

「寒くなくても少ねえだろ。」

「トシ。いつからいた？」

「またそれかよ！挫けねえからな！」

へビースモカーだから味覚マヨ^ズくしななんだろうな。

「で。何の用？」

「佳奈は冷てエな。」

「まーた。元カノと比べないですよ。」

暇な日とか来てくれるのはすごい助かる。強盗とか入りそうだしね。

「あー…、寒い。そろそろマヨホンデュの季節だな。」

「そのホンデュ何？普通チーズとかチョコレートだよね？」

「あの油が浮いた感じがいいんだよ。」

「あーやだやだ。想像したくもない！」

今日は総悟来ないんだ。

「俺とキスしたらどっちの味分かるぜ？」

「急になに！」

「マヨかタバコか。」

ニヤリッと笑ったトシの顔はカッコイイと思う。

「どっちもやだ。私はまだまだ子供なんでね。」

「子供…か。」

そうつぶやき、トシは帰ってった。

冗談だよね。

うん。

熱くなる頬が私の気持ちを惑わせた。

神様どうかリアリティを僕に下さい

お店の前を掃いていたら山崎くんが屯所の門からちよつと出てきた。

「山崎くん今日もお疲れさま！」

「佳奈さん。お疲れ様です！」

なんか、疲れてる？

「タベ副長に徹夜で報告書書かされてたんですよ。」

「そうなんだ。大変だったね。」

トシは鬼の副長と呼ばれてるらしい。そんなに怖いのかな？リアリティがわからない。

「何ウロウロしてんだよー！」

「わっ…隊長！今すぐ車出します！」

「土方の野郎機嫌悪すぎでイ。」

そんな総悟も機嫌が悪そう。私は声をかけないようにした。

「佳奈。そこにいるのは分かってまさら。」

「いやぁ奇遇だね！」

「今から山崎とドライブに行くんだけどよイ。佳奈もどつでさら？」

「どーせ見廻りでしょ？」

ちょうど山崎くんが車を回して来た。

「ちっ。タイミングの悪イヤツ。じゃあまた土方の野郎と三人で！」

「うん。考えとくよ。」

パトカーを見送った。

機嫌の悪いトシってどんなのだろ。元からぶっきらぼうな感じではあるけど、分かんないなあ。

「よう。」

噂をすれば影だね。

トシが道路を渡って歩いて来た。

「週末は忙しいぜ全く。佳奈んトコも棚卸しあんだろ？」

「お疲れ。ウチは両親がやってるからね。けどバタバタしてるかも。」

「近藤さんがお一人良しすぎんだよ。俺も精一杯アシストしてるつもりだけどよ。あー、さすがに疲れた。」

トシが愚痴ってる。

なんか嬉しいな。愚痴ってくれるのって珍しいしね。

「なにニヤニヤしてんだ？」

「トシも人間だったんだなあって思ってたさ。」

「はあ？…じゃ、俺は戻るわ。」

やっぱりトシも機嫌が悪い日があるんだ。
それはリアリティ溢れる事実だね。

銀髪と白髪の違い

遠目から見たら銀さんは白髪だ。けど、それは誰にも…

「オイオイ。白髪の旦那また来てるぜイ。」

「総悟！白髪とか言っちゃダメだよ！」

思った矢先に総悟が裏口から入って来た。

「じゃあ、信号を青と言わないのかイ？アレは緑だろイ。」

「あー、それは決まりだからね。」

「めんどい。白と銀は同じってコトにしとけよイ。」

総悟がアイマスクを取り出した。

「暇で良かった。俺は親父さんの隣で昼寝でもするかねイ。」

「いや、手伝えよ。」

裏に行く総悟。

「佳奈。元気？銀さん来ちゃったよ。」

「銀ちゃん。見えてたよ？昨日も来てたよね。中まで入って来ないからどうしたのかと思ったよ。」

「いやあ。急に仕事が入っちゃってね。」

「仕事？変な銀ちゃん。」

銀ちゃん面白いなあ。あ…まさか、白髪なら白ちゃんになるんじゃない？

「聞いてる？」

「あ、ごめんね。白ちゃん！」

しーん。

「で、新発売のお菓子食べたくなっただ。オススメある？」

なかったコトにされてるー！？良かったのか悪かったのか分からない。

「このチョコ饅頭どう？安いしおいしいよ。」

「饅頭は白いのが美味しいからいいや。じゃ、白ちゃんまた来るわ。」

根に持ってらっしゃるー！

銀ちゃんは帰った。

「ぷっ…。白ちゃんとは、佳奈は馬鹿でさア。」

「笑っただったら笑ってよ！」

「そろそろ戻んねえと土方の野郎に…」

「総悟オオオ！またここかアアアア！」

「げ。じゃまた。」

なんか、こんな日も好きだな。

一人になりたい時もある

1年に一回くらいかな。ずーっと部屋に引きこもりたい日がある。

今日がまさしくそれだ。

実家暮らしで何を贅沢な。と言われそうだけど、理屈じゃないんだな。

「今日はどうも接客できそうもないんで。」

「いつも客なんて数人じゃない。」

「うめん。」

お母さんにそう伝えて布団にもぐった。
罪悪感と開き直りが私の頭を支配する。

けど人に会いたくない日もある。

「引きこもりか？」

「えー？いつからいた？」

「普通にお前の母ちゃんがドア開けた時に決まってる！」

トシがベッドに腰かけて座ってる。

「今日は一人になりたいの。一人にして。」

「贅沢だなオイ。そんな時大抵一人でいたら、ぐずぐず嫌な事ばかり考えるって。」

「……。」

「佳奈ー？聞いてんのか？」

あーうるさい。こういう時一人にさせてくれる人がいい。

「土方さん帰りますぜ。」

「しょうがねえな。じゃ、また来るから。」

へえ。総悟もたまには気が利くじゃん。

「あの女はいじけ芋ムシがお似合いでさア。」

ちよつと今のさすがにイラッと来たよ。

二人はドアも閉めずに帰ってつた。ドア閉めてよ。

サボりつて人は言つかもしれないけど、私は1年の疲れをリセットしてるつもりだ。

芋ムシ上等！

…

「芋ムシは言い過ぎじゃねえか。」

「佳奈が立ち上がればいいんですア。」

二人はこんな会話をしていた。

鬼の副長

「オラァ！サボってんじゃねえぞ！お前、刀なら刺さってんだろ！
」

鬼の副長の声が道場に響く。

「総悟！」

「…。」

「総悟オ！！！」

「はぁ…。いくら何でも機嫌悪すぎでナァ。」

ギロリとトシに睨まれる総悟。他の隊員はハラハラとその状況を見守っている。

「機嫌が悪いだど？」

「女が原因で情けねエ。なあ山崎？」

「俺っすか？」

「山崎いい！」

「ハイハイ？」

山崎が八つ当たりされたのだった。

稽古後。

灰皿にタバコが山のようにつもっていく。

「そして貧乏ゆすりってか。」

「近藤さん。」

「総悟がメガホンで叫び回ってたぞ。女が引きこもりになったんだ

って？」

「どうすりゃいいんすかね。」

…。

「総悟みたいな対応がモテるって誰かが言ってたぞ。」

「総悟？」

そっぴゃ、佳奈をほっというたな。

「ま、たまには機嫌の悪いトシもいていいと思っぞ。」

「近藤さん。」

あなたについていきます。

「あー、ウ」出ぞ。さっき行ったらトイレ混んでてさあ。」

「はあ。」

こんな近藤さんだからいい…のか？

立ち直り早いんです

引きこもった翌日私は平然とスーパーのレジを打っていた。

もちろん営業スマイルで。

「真選組ソーセージ一点。」

「もう立ち直ったのかよ。つまんねエ。」

「わ。総悟!」

「土方の野郎柄にもなく落ち込んでだぜイ?」

領収証は真選組当て…と。

「私何か言っただけ?」

「ま、佳奈の立ち直りの早さは今に始まったことじゃねエけどねイ。」

ニヤリと意味有り気に笑って店を出る総悟。

久しぶりに店が混む嬉しさよりトシが気になっていた。

閉店後。

ちなみに8時閉店。両親のやる気のなさが伝わる。

私は店の前で待っていた。

ちょうど真選組屯所の門が開いた。

「よう。元気そうじゃねエか。」

トシがここにタバコを吸いに来る時間当たってた。

ちょっと予想した自分が恥ずかしくなる。

「昨日は落ち込んでいい日なの。充電っていうか、トシには分かんない?」

トシはゆっくり道路を渡って来た。
そして隣に並んだ。

「それをサボりってんだよ。あのまま引きこもりになりゃ良かったんじゃないか？」

ポン…と頭をなでられ、私はうつ向いた。

「タバコ臭い。」

「俺？」

「体に毒だよ。」

「へー。心配してくれてんのか。」

薄暗く見えるトシの顔がいつもよりかっこよくてドキリとした。

「鬼の副長さんは自慢の友達だからね。」

「...。そろそろ戻っか。」

トシはそれ以上は何も言わなかった。
私は門を開けるトシをただ見ていた。

「カーツト！銀さんは？ねえ。銀さん出番無し？」

「あはは。今日は無いみたいだね。」

「いいや。俺もう帰る。」

銀ちゃんの後ろ姿は寂しそうだった。

押してダメなら引いてみよう

ってわけで俺こと銀さんは、押してダメだから引いてみようって思っただよね。

「存在を気付かれて無いだけアル。」

「もう通うのやめた方がいいよ。てかやめて働けよ。」

「別に片思いとかじゃねーし。妹を見守ってるだけだし。」

こうして俺は散歩に出た。

うん。

俺はね諦めが悪いのが取り柄だけど佳奈のことは…。

「あ！銀ちゃんだ！」

「へ？佳奈？」

「近くに來たから遊びに來ただけど、迷惑だった？」

迷惑と言つか今きっぱり諦めてパフェでも食べよっかななんて思っ
て歩いてたのに。

「あー、やっぱりだね。」

「え？迷惑だった？」

「スキだったってんの。」

固まる佳奈。

あれ。俺今何だった？

「銀さん！またサボろうとして！…あれ？佳奈さん？」

「あ、新八くん。ごめん私帰るね。」

こうして俺の告白は風と共に去って行った。

「ってこれで出番無しになんねえよな！」

「何の話ですか？早く行かないと姉上に怒られますよ！」

「…忘れてた。」

「告白のことは黙っててあげますから。」

「新八。」

「はい？」

「銀さんパフェ食べたい。」

その頃佳奈は辞書でスキを調べてた。

「これだ！この『隙』！」

こういうヤツをただのバカと言う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3524x/>

新撰な彼ら

2011年11月29日20時54分発行